近代的消費の誕生

安　原　荘　一

Ⅰ　問題意識

16世紀以降のヨーロッパ社会において，伝統的な共同体的秩序の崩壊と共に，流行の存在，消費の単位の個人化，生産の場と消費の場の（性別役割分化を伴う）分離等の特徴を持つ「近代的消費」が都市部を中心に徐々に発達してきた。この問題に関しては，奢侈の発達が近代資本主義を生み出したというゾンバルトの古典的研究を始め，ヴェブレンの「有閑階級の理論」，また本邦においては，産業革命の需要面での要因を探るという経済史的観点からの研究（川北稔氏等）が積み重ねられてきた。しかし従来の研究に共通する問題点は，

①人々が，効用を最大化するように行動するという近代経済学視点（あるいは「使用価値」に基づくというマルクス主義的観点）

②人々が社会的威信を求めて消費行動を行うという観点

のいずれもが近代社会の消費行動の原理をそのまま「遡及主義的」に過去に持ちこんでいるようであり，近代的な消費観を相対化していくという観点に欠けているという点にあるように思われる。

この点に関してラディカルな問題提起を行ったのは，バタイユの社会学，経済人類学，記号論的研究であった。しかしバタイユのいわゆる「蕩尽論」には，あらゆる社会に通底して存在する「蕩尽」現象を解明する観点に立ったため「近代的な消費」を相対化する上では逆に使いづらい点があり，経済人類学的研究（様々な論者を注意深く区別する必要があろうが）も，近代的な消費の持つ「儀礼性」等未開社会との共通点を探り出している点は興味深いものの，例えば流行の持続的存在等，近代社会における消費の独特の性格を充分に説明するに至ってはいない。記号論的研究（これも様々な論者を注意深く区別する必要があるが）は，人は「記号」を消費するという観点から，その記号体系を解

明する手法を確立した点，また「記号生産」のメカニズムやそこに潜むイデオロギー等を明らかにした点には大きな意義があるが，近代社会以前の「記号消費」のあり方と近代社会固有の「記号消費」のあり方とを理論的に明確に区別しているとは言い難い。

むろんこれらの研究が，人類学的な研究等を踏まえて従来「効用」等に基づくとされてきた近代的な消費観を批判し，相対化したという点は充分に評価される必要があろう。しかし，その反面近代社会における消費の固有の位相が見えにくくなってしまったきらいがあるのではなかろうか。

このような問題意識から，本稿では，近代的な消費の確立期である16世紀から18世紀にかけてのイングランド社会において消費のあり方にどのような変化が起きたのかをカナダの社会学者G. McCrackenの研究を軸に解明し，さらに紙数が許せばそれを理論的に把握する契機を見出だすことも試みたい。

II　問題設定

初期消費社会現象（16世紀〜18世紀にイングランドを中心に展開した「産業革命前」の消費ブーム）を「説明」する上で，しばしば用いられるのが『顕示的消費論』(Conspicuous Consumption Theory)，『滴り理論』(Trickle Down Theory)，『社会的競争論』(Social Emulation Theory）である。この三者は，同じ現象に，それぞれ「消費の動機」(見栄，体面維持)，「流行の方向」(上から下へ)，「階層間あるいは階層内部での競争」と言う観点から焦点を当てたものと考えることができるのであるが，ここで問題なのはこのような「説明」が初期消費社会を引き起こした「原因」を充分には説明できてはいないように思われるという点である。たとえば『顕示的消費論』は「見栄の…差別的な比較の…性向は，古くから成長したものであり，広くゆくわたった人間性の特徴である」(「有閑階級の理論」邦訳p.107）というある種の「本能論」の立場をとっている。そして「古代の特性の保存」「現代における武勇の残存」等過去の習性の現代における残存という観点から消費の問題を論じていこうとする。

たしかにバタイユやボードリヤールが指摘するように「蕩尽」あるいは「見栄」と言ったものは『人間の本性』と深く結びついた何かではあろう。しかしこのような汎歴史的な観点からでは，例えばなぜ近世のある時期に消費の爆発的なブームが生じたのかといった具体的な問題を考えていくことが不可能になっ

てしまう。ドイツの歴史社会学者N.エリアスは「ウェブレンは『威信のための消費』に関する彼の研究において，市民的価値観を他の社会の経済行動様式にも尺度として採用した結果…『威信のための消費』の社会学的分析の道を自らふさいでいるのである。」（「宮廷社会」邦訳 p.104 ）と彼の方法論を批判しているが，まさにこの汎歴史性にこそウェブレンの「顕示的消費論」の問題点が存在するように思われる(注)1

(注) 1　「社会的競争論」や「滴り理論」も現象の記述には妥当性を持つ議論であると思われるが，初期消費社会現象を引き起こした「原因」を解明していくに際しては不十分な議論であるように思われる。なお詳しい検討はここでは行わない。

さてでは「初期消費社会」現象の「原因」をいったいどのように考えて行けばよいのだろうか。前出のエリアスは以下のような興味深い指摘をしている。

「ある一定の社会階層が，社会発展の種々の段階においてある過程の中心となり，それと共に他の階層にとってのモデルを形成するということ，これらのモデルが他の階層に広がっていき，そこで受け入れられるということは，そのこと自体すでに，社会全体のある特別の状況とある特別の構造を前提としており，この状況と構造から，ある階層にはモデルを作り出す機能が，他の階層にはモデルを広め，変形する機能が与えられる。人間の振舞のこれらの変化を引き起こすのは，社会統合のどのような変化であるのか…」（「文明化の過程」邦訳上巻 p.254 ）

エリアスが指摘するように，「顕示的消費論」「社会的競争論」「滴り理論」等で説明される「初期消費社会現象」が生じた背景には，より根源的な「社会統合」のあり方全体の変化が潜んでいるように思われる。とは言えそれは一体どのような変化なのだろうか。

筆者はこの問題を考えていく上で重要なのは「王権―都市関係の変化」と「（財の主要な分配システムの）互酬・再分配→市場への変化」であり，それと共に重要なのが「国家観―家族観関係の変化」，また宗教的な要素としては「彼岸への関心の変化」（心性は徐々に，彼岸への関心よりも，自らの情動という資本や苦悩を近親者への愛着，地上での営為に投下しようとする方向へと展

開していく」…ビュルギエール『現代思想1989.5 p.74』）と言ったものがあげられると考えている。

本稿ではこれらの点に関して「消費革命」という観点から考察を加えているG. McCrackenの議論を軸に考察を加えていくことにしたい。

また財の分配システムの変化（贈与，互酬制から市場制へ）に関しては軽く触れる程度に留めて置くことにしたい。というのも従来例えばマルクス主義の立場などからしばしば言われてきたように資本主義（市場経済）の成立がそれに見合う意識形態を生み出したのではなく，より根源的な社会統合のあり方の変化がまず意識（欲望）のあり方に変化をもたらし，それが従来限定されてきた市場システム（K. ポランニーによれば近代以前の社会において市場は対内市場と対外市場とに分けられておりそれぞれ共同体，国家の厳しい統制下に置かれてきた）の全面的な拡大をもたらしたと筆者は考えるからだ。

III　近代的消費の誕生

1．序論

近代化の重要なメルクマールとしてしばしばあげられるのが産業革命である。その要因は従来資本主義を「資本賃労働関係」の成立という観点から押さえるマルクス主義の観点からその本源的蓄積過程が，また「合理化」の過程として捕らえるウェーバーの立場から様々な領域に於ける合理化過程や職業倫理の成立過程が，そして「市場システム」による社会の支配という観点から（ポランニー），土地，労働，貨幣の「擬制商品化」，及び「市場」の特殊性（他に「互酬」「再分配」等のシステムが存在した）とその起源（対内市場と対外市場の独立起源），がそれぞれ探られてきた(注)1。

(注)1　他に技術史的な観点や，人口動態に焦点を当てたより実証的なプロト工業化論等様々な議論があるがその紹介は現時点での筆者の能力の範囲外であるし，本稿の目的から言ってその必要もないであろう。

さて，しかしごく常識的に考えてもわかるように，産業革命が起きるためには前もって伝統的な消費のあり方にも変化が生じてなくてはならないだろう。何故なら産業革命が新たな大量の需要を引き起こしたことは確かだとしても，

それ以前の段階で何等かの形で需要のあり方に変化が生じていなければそもそも産業革命自体が生じる訳がないからだ。「流行現象（モード）」やそれに基づく消費をめぐる社会的競争が前もって生じていなければならないはずだ。

近年これらの点に関して歴史学，社会学の観点から様々な研究が積み重ねられてきている。本邦では川北稔氏が経済史と法制史の観点をミックスさせ，「奢侈禁止禁止法」を題材に興味深い研究を行っている。本章ではこの点に関して「消費革命」という観点から分析を行っているG. McCrackenの研究を軸に考察を加えてみることにしたい。

2.「消費革命論」

近代化に伴う消費のあり方の変化は一般に「消費革命」と呼ばれている。そしてこの消費革命は，単に消費の量的増大を示すのでは無論ない。McCrackenによれば，消費革命とは「趣味，購入習慣，好みに於ける変化だけではなく，初期近代世界，そして近代世界に於ける文化の根本的なシフトを表す」のであり，それはさらに「西洋に於ける時間，空間，個人，家族，そして国家の概念をも変えた」ものとして今や理解されているという。

無論「消費革命」がそれ自身の理論だけでこのような変化を引き起こしたわけではないだろう。しかし，筆者はたとえば「自然観」，「文化的性差」のあり方等に関しても，「消費革命」が一定の作用を及ぼしているものと考えている。

この点に関してたとえば美術評論家の多木浩二氏は，社会学者内田隆三氏との対話のなかで，近世初期のモードが男女，階層，年齢等の宮廷社会とは異なった社会的差異のカテゴリー」に基づいて展開しているのに対して，ある時期から「モードのほうがそういう社会的カテゴリーを非常に恣意的に分節する機能をもちはじめ」たのではないかと指摘している。（「現代思想」1989.10 p.118）

果たしてモードにそこまでの「機能」がそれ自身として存在するのかどうかは筆者には疑問であり，近代になって成立した様々な社会的カテゴリーにはやはりそれを成立させる固有の内的論理が存在する～たとえば男女に関しては一般に「家父長制」と呼ばれる論理が，また年齢に関して言えば「子どもの誕生」（F. アリエス），「学校化社会」（I. イリイチ）等～様に思えるが，しかしまたそれらの論理が，商品経済の全面化という広い意味での「消費社会化」に際して，その内属する身体に商品を媒介として体験される際に，「駆動力」として

モードが一定の作用を及ぼしたことも確かであろうと筆者は考える。そしてここでむしろ考えねばならないのはその際に「モード」が担った方向性ではないだろうか。すなわちそれらの「論理」を強化する方向で「モード」が作用したのか，それとも解体する方向で作用したのか。

ごく一般的に言えば近代固有のカテゴリーの成立期にはそれらの「論理」を強化する形で，また解体期には解体する方向で作用したのだろうと筆者は考えている。(そしてこの限りにおいて多木氏の指摘―「ある時期からモードが社会的カテゴリーを非常に恣意的に分節する機能をもち始める」―は「恣意的」という言葉には留保が必要であるにせよ理解可能である。)

さて「消費革命」とは具体的にはいったいどのような事態を指すのだろうか。McCrackenによればこの点に関して現在定説は存在せず様々な見解が入り乱れている状態であり，それは，彼によれば，「消費革命」を消費のどこに注目して論じて行くかという本質的な問題とも関連している。

本章ではMukerji, Mckendrick, Williams 等の先駆的な研究に基づきこの問題に関する論点の整理したMcCrackenの研究を紹介しつつ，「消費革命」とは何かという問題を考えてみることにしたい。

McCrackenによれば，16世紀のイングランド，18世紀の同じくイングランドにおいてそれぞれ消費が「新しい規模と変化した性質を獲得しつつ決定的に前進した」とされる。いったいこれらの段階でどのような変化が生じたのだろうか。まずこの点から「消費革命」に関する考察をはじめて行くことにしよう。

(1)　16世紀イングランドにおける消費ブーム

i 特徴

McCrackenによれば，エリザベス朝イングランドにおいて1545年頃，劇的な消費ブームが生じた。その担い手である貴族達は，宮廷の席を新しいより壮麗なものへと作り替え，ロンドンの住居での消費を拡大し，訪問客をもてなす歓待（hospitarity）を，より儀式的なものへと変化させた。

この当時考案された歓待の様式として，特に興味深いのは，ante-supper（前夕食）と呼ばれる独特の習慣である。これは，ただ単に客の前に並べられるだけですぐにかたづけられてしまうという奇妙な料理で，その後で，より本格的な正式な食事が出される。その詳しい内容等は筆者には不明であるのだが，ポトラッチを連想させる点等が興味深くさらに調べて行きたいと思っている。

また，この当時，持ち衣装に対する支出等も増大したのであり，この時期の消費ブームは，貴族層を中心に顕示的な消費が増大したという点に，その一番の特徴があるとMcCrackenは指摘している。

ii 原因

さて，しかしいったい何故このような消費ブームが生じたのであろうか。McCrackenはその原因を以下の二点に求めている。

まず一点目に彼があげたのは，この時期に王が消費を統治の手段として利用し始めた(注)1という事実である。消費を統治の手段とする習慣は，ルネッサンス期のイタリアで始まったのであるが，当時の国王エリザベス一世はこの影響を受け，彼女の父ヘンリー八世当時には考えられない水準の消費を繰り広げた。

(注) 1　その具体的な内容も興味深いので，二点ほど紹介しておきたい。

まず一点目は，「財のシンポリズム」の「充電」による国王の政治的な力の強化である。McCrackenによれば「非常に儀礼的な宮廷のコンテキストにおいて，君主の統治の正当性，王国への野望，権力と荘厳さの性質，そして神話的，宗教的文学的な用語によって理解されてきた（国王の）神的地位」が財によってコミュニケートされるようになったという。その具体的な中身は筆者には不明なのであるが，財の持つ威信的な性質に本質的な変化が生じたことは確かであろう。

二点目は，貴族に消費を強いることにより支出を増大させ，貧窮化に追いこむという経済的な側面である。McCrackenによればエリザベスは単に王的な恵み深さ（bountry ）の起源であるばかりでなく，この恵み深さの直接の源泉であると主張し，従来媒介者を通じて貴族へと手渡されていたその貴族の地位を保証する証は，直接エリザベスから手渡されるようになったという。この結果，貴族はいやがおうでも宮廷に参内せざるを得なくなり，その儀礼的な秩序に巻きこまれざるを得なくなる。その出費は破滅的なものであった。

次に彼があげるのは，エリザベス朝の貴族間で繰り広げられた消費をめぐる社会的競争である。当時のイングランドにおいては（他の西欧諸国と同様に），地方在住貴族の「宮廷化」が進行していた（イングランドの場合はまず社交シー

ズン成立という形をとった）。そしてそれぞれの地方においては，その頂点に位置する貴族も，宮廷においては多くの個人の一人に過ぎず，ここに消費をめぐる社会的競争が生じたのである。それらはMcCrackenによれば，「自己の名誉」，「社会的競争」，「君主との関係」等，様々な要因によって突き動かされていた。

iii 影響

このように，主に貴族を中心に展開した16世紀の消費社会現象は，社会全体の消費のあり方に，いったいどのような変化を引き起こしたのだろうか。McCrackenは，特に「家族」と「地域」の性格に大きな変化を与えている点を指摘している。結論を先取りして言うならば，「家族」に関しては消費の個人化が，また「地域」に関しては，そこにおける「支配層」と「被支配層」の分化がその変化のもっとも重要な焦点である。

まず，家族に関して見てみることにしよう。McCrackenによれば，中世以降イギリス家族では「家族ステイタスの崇拝（cult）」が行われてきた。それが，この時期以降，次第に減少し，消費の単位の個人化という事態が発生したのである。従来，消費は，家族の地位をめぐって行われてきた。それは，数世代にわたる一団によってなされる集団的な事象であった。消費団としてのチューダー朝の家族は，数世代にわたって伝えられ，ステイタスの主張を増強できるものを求めていた。

それが，この時期，「個人化」したのである。McCrackenによれば，その背景には，パティナからファッションへの移行，という大きな変化が潜んでいるのであるが，それについては後で細述することにして，ここでは消費の個人化という結論のみを指摘するに留めておきたい。

次に地域に関してであるが，ここでは，興味深い，二種類の一見相矛盾する変化が生じていることを，McCrackenは指摘している。すなわち，この時期一方において「地域共同体」が宮廷を中心とした「trickle down（滴り）的消費」から除外されると共に，他方において被支配層の消費の準拠集団が宮廷へと変化したのである。この両者の関係は，16世紀の消費社会が持つ意味を理解する上で重要であるように思われるので，さらに詳しく見てみることにしたい。

McCrackenによれば，16世紀以前の各「地域（locality）」において，貴族は地域社会の最高位のメンバーとして，特殊な政治的，社会的，経済的な責任

を負っていた。また貴族はそこを通じて様々な国家の富が地方へと入りこむ港であった。地域共同体の構成員は貴族の「気前のよい贈与（largesse）」を重要な富と見なし，これらの富を様々な儀式の機会に受け取ったという。

ところが貴族が彼の時間と金を地域から離れて使いだすと，「気前のよい贈与」のいくつかが中止されるようになり，また貴族が従来被支配層との間で取り結んできた「相互取り引き（reciprocal bargain）」からも退却し始めた。同時代人達はこの動きを「歓待の死（death of hospitality）」と呼び，貴族がロンドンにおいて従来とは異なる彼等流のやり方で飲食し，家を立て，装い始めた際に地域共同体が被った裏切りについて苦々しくこぼしたという。

さらに従来は，国王から貴族へと下賜されたものは，さらに彼の部下へと受け渡されていた（共同体はその「家政」への一定の富の分け前によって資格づけられてきた）のだが，貴族がロンドンでの新たな社会的競争に対する支出に駆り立てられると，地域共同体はこの消費への参加から除外されてしまうという事態が生じた。

以上の議論をまとめてMcCrackenは，「歓待の死」等により，地域共同体が，国王を中心とした「trickle down（滴り）的消費」から除外されたという点に，この時期の消費ブームが地域に与えた影響を結論づけている。

果たして「trickle down（滴り）的消費」という概念を，互酬，再分配的な経済システムが強い段階での消費のあり方に適用してよいのかどうか多分に疑問であるが，ここで地域共同体と貴族層の間に断絶が生じたというMcCrackenの指摘それ自体は，妥当なものと筆者には思われる。

このような貴族と地域共同体の関係の変化は，消費の質にも大きな影響を与えていることをMcCrackenは指摘している。

まず貴族の消費の嗜好，好み，価値観と言ったものが大きく変化した。同時代人によれば貴族達は「海外の匂いのする」財とサービスを採用したのであり，それは地方共同体の構成員には「宮廷」あるいはより一般的なヨーロッパの支配層のほうを向いたものとして理解された。

そして従来支配層と被支配層の間消費における好みの差は程度の問題だったのが，質的な違いとなったのである。それは，支配層が，共同体との間の伝統的な「相互取り引き（reciprocal bargain）」を取り止めたことによりさらに拡大した。というのも，支配層と被支配層が出会う機会（地域の儀式や様々な

イベント）が減少し，支配層が影響力を行使する機会が減ったからである。

ただし，注意せねばならないのは，これらの変化にもかかわらず，オピニオンリーダー，の嗜好，感性の形成者としての支配層の影響力は，続いたという事実である。16世紀の高度にヒエラルキー的なイングランド社会において，被支配層の嗜好は，常に支配層によって支配されてきたのであり，否応なしに被支配層は大規模な「宮廷社会」のスタイルとファッションの支配下に入るようになったのである。McCrackenは，この事態を，被支配層の準拠集団の変化，という観点で押さえている。すなわち被支配層は，従来貴族層を，その消費行動の準拠集団としていたのに対して，この時期から宮廷を，その準拠集団とし始めたのである。

とはいえむろんまだこのじきには被支配層は貴族層の消費パターンを模倣し始めてはいない。被支配層にとって貴族層の消費パターンは「気障で異国風の胡散臭い性質」のものに思われており，彼等は一定の距離を貴族層に対して取っていたからである。

しかしMcCrackenが指摘するように「（この準拠集団の変化は）後の消費の爆発への道と，16世紀の時点では除外されていた社会集団の「消費への参加を準備した」のであり，その意味で重要だと筆者は考える。

ただし「準拠集団」という概念は基本的には「近代的個人」を前提にした概念装置であり，16世紀という近代の確立期を分析するに当たってどの程度有効なのかは筆者には疑問である。McCrackenの分析がその具体的な内容へと十分踏みこめていないのもこの点に起因するように筆者には思える。

ⅳまとめ

以上16世紀の消費ブームをその特徴，原因，影響の順に主にMcCrackenの分析にしたがって考察してみた。以下以上の議論をもう一度振り返りその論点を整理してみることにしたい。

①特徴…この時期の消費社会の特徴はまずその担い手が国王，貴族等のごく限られた層であった点に求められる。当時の女王エリザベスは，統治の手段として消費を利用し，貴族層もまたそれに巻きこまれる形で消費を強いられたのである。エリザベスは，彼女の君主としての力の増大を見せつけるための大劇場を創出するために，また力を付けてきた貴族層を貧困化させるための仕組みとして消費を利用し，貴族層はそれに対応する形で消費を強いられた。また貴

族間の社会的競争もそれに拍車をかけた。

②影響…ごく限られた層で展開した16世紀消費社会は，しかしながら後の時代につながる本質的な変化を地域と家族に対して引き起こした。それは「貴族が地域と家族に対して負う経済的，象徴的な責任を果たすことを困難にした」のであり，「家族的ステイタスの崇拝（the cult of family status）と「地域における歓待の実行（the practice of local hospitality)」を困難なものとした。

③帰結…家族的ステイタスの崇拝の減少の結果，消費主体は家族から個人へと変化し，また財の持つ象徴的性質にも変化が生じた。後に詳しく触れられるが，（所有家族の象徴的な欲求を満たすため長期間保持される）「patina」から（個人の社会的競争の手段であり，短期間で変化する）「fashion 」への移行がこの時期始まったのである。

また地域における歓待の減少は地域における支配層と被支配層の緊密な関係の悪化という事態を招いた。両者間のライフスタイルの統一性は減少し後のライフスタイルの分化への道を切り開いた。「貴族はいまや消費の汎ヨーロッパ的基準（宮廷社会）に従うようになり，被支配層は，彼等の新しい好みと浪費に驚き，また軽蔑の念を抱きながらも，注意深くこの後に従って行った」のである。このことが一世紀後に始まる消費の爆発への道を切り開いた点はMc-Crackenもくり返し指摘している重要なポイントである。

⑵　18世紀イングランドに於ける消費の爆発

i 概要

18世紀イングランドは消費の爆発の時代であると言われる。財の世界は劇的に拡大し，財の購入される頻度，消費者に対する影響力，能動的に消費に参加する消費者の数なども増大した。この時期から消費されるようになった財としてMcCrackenは家具，陶器，銀，鏡，刃物，ペット，織物等をあげている。

さてこのような消費の爆発の原因はいったい何なのだろうか。McCrackenは18世紀に消費社会が誕生したとするMcCrackenの主張を紹介しつつその原因を社会的競争に求めている。

『イングランド社会の緊密に成層化された性質，垂直的社会移動への闘争，社会的競争（emulation）や社会的闘争（competition）によって生じるファッションの強制的な力，…こういった性質が結合して，以前には存在しなかった

消費性向を生む。』

この点に関する考察は興味深い論点を数多く含んでいるのだがそれは後にしてさらに全体像を見て行くことにしよう。

さてさらにこの時期から

①従来両親から相続されていたものが各個人によって購入されるようになった。（相続から購入へ）

②従来「必要」によって買われていたものがファッションによって購入されるようになった。（必要からファッションへ）

③一生に一度しか買われなかったものが何回も購入されるようになった。（購入回数の増加）

④祝日や休日にのみ，市場の代理人（agency）や定期市，巡業の行商人を通じて入手可能だったものが，徐々に日曜を除いた毎日，商店や小売商人の発達しつつあるネットワークの代理人を通じて入手可能になった。（入手可能性の増大，市場の変質）

⑤贅沢（luxuries）は単なる体面（decencies）と見なされるようになり，そしてそれは必要（necessities）と見なされるようになった。（贅沢→体面→必要へ）

等の変化が生じていることをMcCrackenは指摘している。McCrackenによればこれらの変化のうち

●家族のための消費から個人のための消費。

●ファッションの変化によるはやり廃りは既に16世紀の時点で存在したのであり，18世紀に於けるそれはその量的な拡大に過ぎないのであるが，その他の点はこの時期から始まった本質的な変化である。

ii 文化と消費の結合

さて以上のような18世紀イングランドに於ける消費社会の本格化，即ち別のまとめ方をすれば，

①市場の時間的，空間的な爆発的拡大。

②消費者の選択の幅の拡大。

③参加する比率の拡大。

は文化と消費の結合を広い範囲で生じさせた。この結果この時期から様々な興味深い現象が観察されるようになる。McCrackenは特にこの時期から「市

場操作」のために様々な技法が開発されたことを指摘している。

これは単に大転換（特徴，労働，貨幣，の「擬制商品化」）のもう一つの側面という点で興味深いのみならず，「王権の自壊」過程から消費社会現象を捕らえるという多木浩二氏等の試みとも関連しているように筆者には思われる。以下詳しく見てみることにしたい。

(1) Jocich Wedgewood…市場操作の発達

McCrackenは，Jocich Wedgewoodという陶器商人を，trickle down効果を計算し市場を意識的にコントロールすることに最初に成功した商人として取り上げている。当時のヨーロッパ社会に於けるファッションの流れは上から下へと，支配層の差別化と被支配層の模倣によって動いていた。

Jocich Wedgewoodはこの動きを計算し，彼の商品を宮廷や貴族等の上層階層に献上し，その生活様式に取り入れさせようと試みたのである。同様の例は茶，服装等にも存在したことは角山氏，川北氏等の研究でも紹介されてはいるが，Jocich Wedgewoodはそれを意識的に試みた最初の一人であった。

McCrackenはこの事態を「この自然な市場力の飼いならしは，需要の操作に於ける市場の増大しつつある洗練化の重要な発達の一つとして位置づけられねばならないだろう」と評価しているが，筆者にも非常に興味深い例であるように思われる。というのも本来自由競争の場であるとされる「市場」というものを「飼いならす」ための努力が近世の初期から行われていたという事実は驚くべきことであるからだ。

(2) 市場観察者の誕生

McCrackenはさらにJocich Wedgewoodが生産者が（そして後にはマーケッターが），社会現象の研究者となって市場を操作するという新しい現象の創始者となったという観点からも評価している。

McCrackenによれば，この時期「マーケットエスノグラファー」と呼ばれる人々（その実態は筆者には不詳であるのだが）が出現した。彼等は「18世紀の高度にダイナミックな（市場）環境のパターンと法則性を観察し，彼等の学んだことをマーケッティングの道具とした」のである。彼等は市場から学んだ様々な知識を応用し，それらは「状況のダイナミズムへとフィードバックされた」。その結果よりダイナミックな市場環境が作り出されたのである。

McCrackenは「この参与観察者は文化と消費の間の西洋固有のより新しい

親密な関係を打ち立てた」と評価している。筆者は商人，或いは生産者が市場を観察すること自体は多くの社会に見られる極当たり前の現象だと考えるが，それらが「文化」の（全面的）商品化という西洋固有の文脈のなかで，ある種のフィードバックをくり返しつつどのような役割を果たしたのかという点はMcCrackenの指摘するように重要な問題だと考えている。この点に関してはより具体的な例を考察していく必要があろう。

(3)　消費者の変容

McCrackenはそのほかにもファッション雑誌，ファッションプレート（新型服装図），ファッション人形等この時期出現した消費者の欲望をあおり，好みを指図しようとする様々な工夫を取り上げている。

ここで重要な点は18世紀の消費者は，自ら進んで消費に関する情報を収集し始めたという点である。McCrackenによれば消費者はこの時期から「買い物により多くの時間をかけねばならなくなり」，また「何がファッショナブルで何がそうでないか，その買い物によってどんなメッセージを送っているのか等を学習するためにより多くの時間を割かねばならなくなった」。

この背景には消費主体の側にもある種の意識の変化が生じているように思われる。それはこの時期にものを消費することの「意味」に本質的な変化が生じていることと関連があるだろう。それはいったいどのような性質のものなのだろうか。

ⅲ18世紀に於ける消費の性質の変化

18世紀は単に消費のあり方が量的に拡大しただけではなくその質の側面においても本質的な変化が生じた時代である。McCrackenはこの時期に三点にわたって大きな変化が生じていることを指摘している。まず一点目は「patina」から「fashion」へと呼ばれる変化であり，これは「モノ」と社会的威信との関係に関する本質的な変化である。二点目は西欧社会において増大しつつある役割分化と匿名化が，財の担う記号的性質に与えた影響，言い換えるならば都市化，匿名社会化が財に及ぼした影響である。そして最後は消費革命とロマン主義的な個人観との関係である。

以上三点はいずれも今日の消費社会現象とも関連した重要な変化であるように筆者には思われる。以下McCrackenの行論に従い詳しく見て行くことにし

たい。

①「patina」から「fashion 」へ

McCrackenによれば中世以後ヨーロッパ社会において財と社会的威信の関係の一つに「patina」と呼ばれるものがあった。「patina」とは「物の表面に蓄積されている小さな徴候」のことであり，「家具，食器，刃物，建造物，肖像画，宝石，衣装」等の表面が「世界に於ける他のものと触れ合うにつれ，それ自身の表面に帯びる」という性質のものである。

さてこの「patina」は厳密に言うと社会的な地位要求とは関係がない。McCrackenによれば「その機能は地位を要求するのではなく，それを正当化することにある」のであり，それは地位の詐称を予防し，なおかつ社会的に適正な地位配分を社会的流動性に対応しつつ保証するという機能を近代以前のヨーロッパ社会において果たしてきたのである。

McCrackenは具体例としてエリザベス朝の家族が地位要求のため使用した銀皿を挙げている。この銀皿はそれが全く新しい場合でもその所有者に高い社会的地位を保証したのであるが，それに「patina」が存在した場合，「patina」はこの銀皿に関する地位のシンボリズムに以下のような内容を付け加えたのである。

(1)銀皿の地位のシンボリズムは根拠を持ったものである。

(2)銀皿の所有者はシンボリズムの詐称者ではない。

(3)家族が長続きしていること，そして所有者のgentleとしての地位が持続しているということ。

さてここで筆者にとって特に興味深いのは(2)と(3)である。まず(2)に関して言えば，あらゆる地位のシンボリズムは，その詐称者によってその根拠を脅かされるのであるが，「patina」はその詐称者を排除する機能を兼ね備えていた。

また，(3)も本質的な論点であろう。McCrackenによれば，当時のイングランド社会においては，五世代ルールというものが存在していた。即ち，地位の購入等によって新しくgentleの地位を獲得した新参の貴族は，五世代の間gentleとしての生活を続けることによって，はじめて「真正のgentle」として認められたのであるが，このことは，社会的地位の獲得に際して，単なる財の獲得だけではなく，それにふさわしい生活様式を身に付けていることが，非常に重要なメルクマールであったことを示唆している(注)1。

（注）1．おそらく「patina」と呼ばれる地位のシンボリズムを支えているのは「モノ」に対する独特の身体感覚～モノの一つ一つにその社会の集合的無意識が宿り，その所有者はモノを獲得することによって自己の身体にその無意識を植えつける―もっともファッションにもそのような性質があるのだろうが，ファッションが「新奇性」という原理に基づいており，そこにおいて「モノ」は他者の視線と自己の身体との緊張関係において存在するのに対して「patina」の場合には「モノ」にもっと固有の存在観があって―おそらく「モノ」と「身体」と「自然」の間に集合的無意識に支えられた渾然一体となった関係があるのだろう～であり，それが社会的地位と結びついているような印象を筆者は受ける。ここから先は具体例にそって見て行かねばならないであろう。特に移行期に面白い例が存在するはずだ。

さて以上のような「patina」を原理とした社会的地位と財の関係は，近代化の過程のなかで，「fashion」と呼ばれる新しさ（novelty）をその原理とするシステムに移り変わって行く。本章では「fashion」或いは「mode」と一般に呼ばれているものに関する最近の議論を検討しつつ，この時期における消費の意味を，考えてみることにしたい。なお「mode」と「fashion」は，ここでは厳密に区別しない。

「mode」の起源は14世紀後半と言われている。その背景には一般に地中海交易ルートの再開，中世末期における社交界の成立等があげられる。おそらく「共同体」の崩壊に伴う「他者」体験が「mode」の出現を余儀無くしたのであろう。

中世社会においては一般に衣服がその社会的ヒエラルキーを反映（興味深いことにその形ではなく「素材」「色」「数」…年に何着新調できるか」等がそのヒエラルキーの構成要素であった。）していた。それに対して「mode」は，とりあえずはその枠のなかではあるが，「新しさを原理に展開して行ったのである。これは，次第に特に宮廷を中心に，全ヨーロッパ社会に広がって行く。その具体的過程の考察は本稿の範囲外であるが，宮廷を中心に発達した新しい恋愛観などが，市民階層の消費パターンにも大きな影響を与えているようである。この点は近代」にとっての他者とは何かという本質的論点でもあり，「mode」の起源を考えて行く上でも重要なポイントであろう。

さて，ここで興味深いのは，「mode」がまず衣服という「身体にまつわるもの」から始まったという事実である。多木浩二氏は，内田隆三氏との対談のなかで，この問題を，より広い観点から論じている。(現代思想　1989-10 P.112～119)

「そこで内田さんに伺いたいのは，なぜ「身体にまつわるもの」が次第にモード化して行ったのかという問題です。というのは，身体から遠ざかれば遠ざかるほど，エフェメラル（つかの間）なモード化が遅くなって行きます。…インテリア，家具ではモード化が生じても建築はなかなかそうはならない。モードということ自体が社会的な現象には違いないんですが，やはり身体にまつわって登場した訳ですね。それはなぜなのか。(同　P.113)

一体なぜなのだろうか。おそらくここに「mode」あるいは「fashion」と呼ばれる社会現象を考えて行く本質的な手掛かりが潜んでいるように思える。さらに考察を進めてみることにしよう。

「もちろん，それには実体的な説明は与えられます。衣服は変えやすいが，建築は変えにくいということ。また衣服は痛みやすいから，本来，取り替えねばならないという宿命もあったが，建築は永遠に持続しうるということ。」(同　P.113)

このような「実体的」な説明はたしかに説得力をもってはいる。しかし，たとえばMcCrackenもあげるように，モードは衣服から始まってアクセサリーや鏡，食器等明らかに「身体にまつわるもの」を中心に展開しているのであり，これらに関して「実体的な説明」はほとんど意味を持たないであろう。なぜなら，たとえばアクセサリーには寿命は存在しないだろうから。モードが「身体にまつわるもの」から展開していった背景には，「実体的」な理由以外の何か別のロジックが存在するはずだ。とは言え，それは一体どのような論理なのだろうか。

この問題に関して，内田氏は多木氏の質問に答える形で，以下のような説明を試みている。やや長くなるが，本質的な論点を含んでいるように思えるので引用してみることにしたい。

「モードというかファッションが身体の周りに構成され，身体を包囲しながら展開していくという状況があったと思うんです。身体を，ある種の人間学的な実定性のなかで，様々なプラグマティークによって形象化していく努力が近

代社会のなかにありました。そこでは…内面の隠喩としての身体領域を場とするモードが認められるわけです。…ところが，ある段階で，身体の輪郭というものが壊れていく。曖昧になっていくという表現をしたほうがいいかも知れません。…そこで身体が空間化し，オブジェ化するというよりも，ブルジョワ的な人間像に準拠しながら獲得していた固有の輪郭を身体が失っていくにしたがって，モードの領域が広がっていく。そのときモードは，単に服装，髪型，小物，体型，化粧と行った身体関連だけではなく，まさに社会の領域のすべてにわたって起こってくる。」(同　P.114)

内田氏の言うように，ある時期（筆者はイングランド社会に関しては18世紀の後半ぐらいまでをさしていると考えている）までのモードは，たしかにある限られた「身体領域」において展開していた。それは，おそらく「王の身体」が社会統合の中心であることと関係あるだろう。内田氏の指摘する「ブルジョワ的人間像」と「王権」の二つの異なった論理の葛藤のなかで近代初期の消費社会現象は展開したのであり，「王権」の論理が強かった近代初期には，モードはまず「自己」と「他者」との関係が可視的な形で直接現れる「身体領域」においてのみ展開したのである。

そして「王の身体」が消滅（イングランドの場合はブルジョワ化）した19世紀移行モードは新しい質を獲得していく。それは，モードを支える論理が完全に都市の匿名空間とそこで生産，流通する様々な広告等の言説に移行したことと関係があるだろう。この点は重要な点ではあるのだが，19世紀以降は本稿の範囲外であるので，ここではこれ以上触れない。

まとめ…18世紀に生じた「patina」から「fashion 」への移行は，モノと社会的威信の関係における本質的な変化であった。前者においては，モノに蓄積されている一種の「年齢」がその財の持つ威信の正当性を保証したのに対して，後者においては，モノの「新奇性」が，その所有者の威信を保証した。後者に関して特に興味深い点は，それが「身体にまつわるもの」から始まったという点である。それは，筆者の考えでは，「王権」と「（都市）ブルジョワジー」との葛藤のなかで，まず直接に「他者」の視線と関係した「身体」の領域においてモードが展開したことと関係があるだろう。ただし，この点に関しては「都市の匿名空間」に関する考察が不可欠であり，本論では結論を保留しておきたい。

②役割分化と匿名化18世紀の「消費革命」は主に都市部（特に首都ロンドン）において展開したのであり，それは，旧来の消費に関する身分制的秩序を次第に解体していったのであるが，ここで興味深いのは，この時期財が従来の身分制的秩序に変わる「新しい種類の地位」の意味を担い始めたという事実である。

McCrackenは，BelkやSahlins の研究を引きつつ，この時期西欧社会における増大しつつある役割分化と匿名化が，財を社会的アイデンティティーの表現と指標として使用することを促したと指摘している。その具体的内容を分析することは本稿の課題ではないが，「patina」から「fashion」への移行という財と社会的威信の関係における根本的な変化を背景に，財の文化的意味が，次第に匿名社会がその中心を維持しうるような性質のものに変化したというMc-Crackenの指摘は，財の持つ記号的な性質を具体的に分析していく際重要なポイントとなるだろう。

③「消費革命」とロマン主義的個人観

18世紀における「消費革命」は，McCrackenによれば「人間に関する新しい文化的定義の原因でもあり，またその帰結でもあった」。

McCrackenは，Colin Campbellの研究を引きつつ，「消費の新しいパターンは，ロマン主義的な自己の定義の原因であり，帰結である」と指摘している。McCrackenによれば，ロマン主義者達は自己の独自性（uniquness）と自律性を主張したのであり，彼らの経験と創造を通じて自己実現を果たすという主張は，「消費革命」によって引き起こされ，またそれを引き起こしたのである。

筆者はCampbellの著作は未見であるためこの点に関してその主張の是非を判断することは控えたいが，「次第に諸個人は自己は消費によって作られ，消費は自己を表現すると考え始めた」という指摘は，「消費と個人主義の融合」，即ち自己の可能性の追求としての消費という今日まで続く近代的消費観の起源として興味深い。

参考文献一覧

赤坂憲雄　1985『異人論序説』，砂子屋書房
浅田　彰　1983『構造と力』，勁草書房
Baudrillard, J.　1970　La Société de Consommation, Gallimard＝1979
今村仁司・塚原史訳『消費社会の神話と構造』，紀伊国屋書店
1977　Oublier Foucault, Editions Galilee＝1984　塚原史訳『誘惑論序説』，国文社
1979　De la Séduction, Editions Galileé＝1985　宇波彰訳『誘惑の戦略』，法政大学出版局
1981　Simuracres et simulation, Editions Galilée＝1984　竹原あき子訳『シミュラークルとシミュレーション』，法政大学出版局
ボードリヤール・フォーラム編　1982『シミュレーションの時代』，ＪＩＣＣ出版局
Corbin, A.　1982　Le miasme et la jonguille, Aubier Montaigne＝1988　山登世子他訳『においの歴史』，新評論
Elias, N.　1969　Uber den Prozess der Zivilisation, Franke Verlag＝1977　赤井慧爾他訳『文明化の過程』上・下，法政大学出版局
1969 The Court Society, Basil Blackwell＝1981　波田節夫他訳『宮廷社会』，法政大学出版局
Hirschman, A.O.　1982　Shifting Involvement, Princeton U. P.＝1988　佐々木毅他訳『失望と参画の現象学』，法政大学出版局
井上泰男　1987『ふだん着のヨーロッパ史』，平凡社
川北　稔　1983『工業化の歴史的前提』，岩波書店
1986『洒落者たちのイギリス史』，平凡社
北山晴一　1985『おしゃれと権力』，三省堂
Laver, J.　1969　A History of Constume＝1973　中川晃訳『西洋服装史』，洋版出版株式会社
McCracken, G.　1988　Culture and Consumption, Indiana U.P.＝1989　小池和子訳『消費と文化とシンボルと』，勁草書房
Mennel, S.　1985　All Manners of Food, Basil Blackwell

O, Neill, J. 1985 Five Bodies, Cornell Unversity

大澤真幸 1988 『行為の代数学』, 青土社

Perrot, P. 1981 Les dessus et les dessous de la bourgeoisie, Librairie Artheme Fayard＝1985 大矢タカヤス訳『衣服のアルケオロジー』, 文化出版局

Polanyi, K. 1944 The Great Transformation＝1975 吉沢秀成他訳『大転換』, 東洋経済新報社

Schivelbusch, W. 1980 Das Paradies, der Geschmack und die Vernunft, Carl Hanser Verlag＝1988 福本義憲訳『楽園・味覚・理性』, 法政大学出版局

Sombart, W. 1922 Liebe, Luxus unt Kapztalisumus,＝1987 金森誠成訳『恋愛と贅沢と資本主義』, 論争社

多木浩二 1984 『生きられた家』, 青土社

1984 『「もの」の詩学』, 岩波書店

1987 『欲望の修辞学』, 青土社

1988 「清潔な食事」, 『現代思想』16-11

1989 「モードの資本論」, 『現代思想』17-11

Thirsk, J. 1987 Economic Policy and Projects, clarendon Press＝1984 三好洋子訳『消費社会の誕生』, 東京大学出版会

上野千鶴子 1982 「商品―差別化の悪夢」, 『現代思想』10-7

Veblen, T. 1912 The Theory of the Leisure Class, Macmillan＝『有閑階級の理論』, 岩波文庫

Wallerstein, E. 1974 The Modern Worid-System, Academic Press＝1981 川北稔訳『近代世界システム』Ⅰ・Ⅱ 岩波書店

湯浅越男 1985 『文明の歴史人類学』, 新評論